

みんなが舟にのってしまうと



極東退屈道場

『サブウェイ』

作・演出◇林慎一郎 振付◇原和代

出演◇あららあ 井尻智絵(水の会)

小笠原聡 門田草 (Fellow House) 後藤七重

猿渡美穂 中元志保 ののあざみ

8/11~14◎AI・HALL、8/25~28◎王子小劇場

極東退屈道場 レイヤーを重ね合わせ“感性”を描く

極東退屈道場 作劇へのこだわり

観劇後に強く感じたことは「こんな作品観たことない!!」でした。ドキュメンタリー調に紡がれる複数の日常と、それらの有機的な繋がり。シリアスな空気を構築した後一気に訪れる、積み木崩しのオチ。更に謎のCMパロディがねじ込まれたかと思えば、全てを包括するかのよう美しいラストシーンが……。とにかくこれらを二作にまとめあげる手腕とアイデアに、心底脱帽させて頂きました。この感性は、唯一無二。その持ち主である、極東退屈道場主宰・林慎一郎のインタビュースト。

戯曲を書く為に、メモを結構とります。こんなことが気になったとか、あれを舞台にのせたら面白いんじゃないかとか、その溜めたメモを「今回はコレでいこう」ではなく、メモ全部を使って、作品を作り始めます。それら全部を繋ぐ糸みたいなものが見つかったら「あ、これで作品になるな」と。メモの内容に関しては……。結構、ペンなモノを探しているかもしれない。僕が引っかけられていることや、ヘンだなあと思っていることとか。基本、短いシーンを繋げて大きな枠を作っていくことが多いので、ひとつのテーマにこだわった物語というより、もっと俯瞰的な視点で作品を眺めようとしています。それがあつた種、僕のこだわりかもしれない。

今作『サブウェイ』のコンセプト

『サブウェイ』はすごく多層的な作品になっていて、まして、地下鉄に乗る人達の7日間を抽出して、彼らのエピソードを



エンゲキの育て方



STORY...これは、地下鉄の乗客達7人の、ある7日間+1日の物語。7人はそれぞれ赤の他人なのだが、同時に何かの「関係」も持っている。その繋がりをもとつづつ丁寧に整理していくと、全く予想だにしない壮大な“オチ”が浮かび上がってくるのだが……。ここで物語は終わらない。この後、半ば強制的に挿入されたCMパロディシーンが続き、更にその先には、聖書の創世記を彷彿とさせる、まばゆいエンディングが用意されていた。

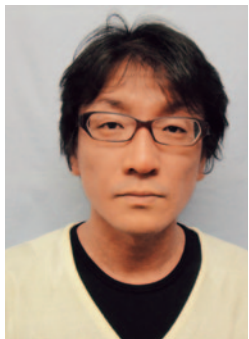
モノログとダンスを織り交ぜて描く——というのが基本構図です。乗客達の近況は、とある外国人映画監督が撮影した、未編集のドキュメンタリーフィルムとして再現されていくのですが、それらを眺めているうちに、映画監督は「あるひとつの結論」に辿り着いてしまふ。その後、延々と続く「モーシャールと、聖書の創世紀に関するエピソードが続き、また新しい何かが始まるんじゃないか……」という予感をもたせつつ幕が閉じる。みたいな感じなんですけど。伝わりますか？(苦笑)。ある人が「コミで出来た神話」というキャッチコピーをつけてくれていますね。

俯瞰して見えてくる「1枚絵」

基本的に散らかしたまま作品を作っていくので、最終的にきちんとした絵に見えるかどうか、という不安は常にあります。特に初演の時は、ダンスの要素とか、色んなものをバラレルに流し込んだので、「お客さんはどういう風に観るんだろう？」とすごく心配でした。でも、レイヤーを重ね合わせて、1枚絵として観てくれる人が多かったんで、改めて演劇の凄さを感じましたね。お客さんと対峙するということは、こんなにも散らかった世界を読み解いてもらうことすら、可能にするのだと、自身、物語と非物語の境界を揺れ動きながら作っているという感覚があります。散らばっているものを抽出して、太い流れを集めていくのではなく、カオス理論じゃないんですけど、散らばっているものが必ずどこかで影響し合っている世界を描きたい。「これはホラーで、そこはCMパロディだよ」とか、そのカテゴリーのエッジを効かすというより、上から俯瞰して見てみると、怖いかと笑えるとか色んな感情が芽生えてきて、それらがひとつのエピソードとして有機的に繋がっている……。みたいな感じかなあ。その辺は狙っているところでもありませんね。ジャンルやカテゴリーを越えた、誰も観たことのないような作品を、これからも作ってきたいです。

ちょっとタネ あかし

煮詰まった時のリラックス法机を離れて、寝転がって、裏紙でも何でも構わないんですけど、書きやすいマジックペンでとにかく書き殴る。文章でも図でも絵でも、作品に関することは何でも。そうしている間に「あ、繋がってるな」と気付く。これ、一種の爽快感があって、最近はかなり助かっています。どこでもいいから転がって、思いついたことを書きまくる。そうすることで、上手いこと整理できたり、全く違う側面が見えてきたり。



林慎一郎

はやししんいちろう(1977年生まれ、北海道出身、劇作家、演出家、極東退屈道場主宰)。07年、自身のエッセイで、書きまくる道場を旗揚げし、以降全作品、演出を担う。関西を拠点に、他団体への脚本提供やワークショップ講師等でも活躍している。次回予定◇水の会「最終公演」11/25◇ウィングス・ワールド